

## 山形県知事賞

## 「白い優しれ」

天童市立第三中学校二年 佐藤 望

私にとって、「ごはんとは優しさのかたまりのようなものだったのだと思います。ごはんは昔から変わらずに食卓に出され、家族みんながそろそろうときにいつももあるもの」「白い優しさ」その「優しさのかたまり」で、私達がみんな幸せになれるのです。

ある日、幼稚園から帰ってくると、祖母が風邪で寝込んでいました。苦しんでいる祖母がとてもかわいそうでした。今思うとただの風邪だったのかもしれない。けれどもその時、真っ赤な祖母の顔から聞こえてくる苦しそうな息が、私までも苦しくさせてしまうようでした。そんな祖母を見ていて、私は少しでも何かをしてあげたいと思いました。私のできることでなんでしょう。絵本を読んであげることでしょうか。歌を歌ってあげることでしょうか。それとも、ずっと側にいてあげること

でしょうか。それらはみんな祖母が私にしてくれたことですが、そのどれも、今の祖母にはうれしくないのではないかと思います。私がうれしいこと…。私が風邪をひいた時にうれしいこと…。

「私だったら、真っ白なごはんが食べたい。」そう思っていました。さつそく、台所へ行って張り切っておにぎりを作り始めました。釜をあけると白い湯気。そして両手でそれをつかみました。熱くって熱くって…。そのときの手の痛みを今でも思い出します。母や祖母の作る、丸や三角のきれいなおにぎりを想像しながら作ったのに、できたものはただの「白いかたまり」でした。中に梅ぼしを入れることも忘れ、でき上がったのは、ほとんど長方形の物体。でも形ができたことに満足し、張り切ってそれを祖母にさし出しました。祖母は一瞬、私を見つめていましたが、何も言わず、食べてくれました。祖母の顔に笑顔が戻ってきたようでとてもうれしかったです。幼かった私でも、何か祖母の役に立てたという満足でいっぱいだったのでしょう。自分でしてもらって一番うれしいこと、それが「白いごはんのおにぎり」であったことを忘れてはいけないような気がします。祖母がおいしそ

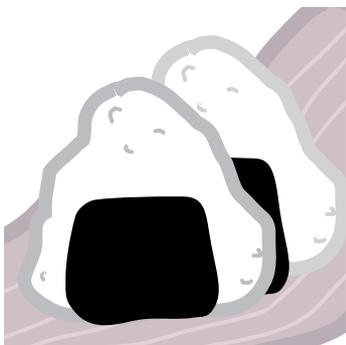
うに食べてくれた時のあの満足感、祖母の笑顔は、忘れたくない思い出です。

私がごはんを大切に思う理由がもう一つあります。私の家は、農家で、米を作っています。私の一年には、田植え、稲刈り…それぞれの景色の記憶があります。

秋のとても暑い日。稲が完全に金色になった日のことでした。私は田んぼの端に座り、ジュースを飲みながら周りを見ていました。祖母はイナゴを取り、父は稲を刈る機械に乗り、それを追いかける祖父。母は取りきれなかった稲を鎌で刈っていました。私は、何だかその景色がとても好きです。家族みんなのおだやかな顔が集まって、とても美しい絵になっていました。稲の香りの中を飛び回るイナゴ達。そのイナゴ達までもが、私には収穫を喜んでるように見えました。また、その中で一つになっっている、父や祖父、祖母、母…そして私。初めて稲を刈った時「これが米なんだ」ただ持っている重さだけでは、わかりませんでした。それでも「この中に私の毎日食べている米があるんだ」と思うと、感動せずにはいられなくなります。家族みんなが一枚の絵の中に見えるような稲刈りの風景。それは私に毎年めぐってくる幸せな

時だったのです。なかなか忙しくて家族みんながそろったことはむずかしいのですが、あのときだけはみんなの顔がありました。家族みんなの心をつなぐ稲刈りの風景の中に…。

あの祖母ににぎってあげたおにぎりの思い出と、稲刈りの思い出はずっと、私に優しさをくれます。そして、祖母がくれた優しき。家族がつくってくれた心のきずなを、私も少しずつ大事に守り続けていきたいです。きっと誰もが将来のことなんてわからないけど、幼い頃、私は母や祖母のようになりたいと思っていたのだと思います。「白いごはん」のような優しさを持つ母親に…。父や祖父のようにしっかりとみんなを見守りながら、田植えや稲刈りの風景がいつまでも続いてほしいと思っています。



## 山形県農業協同組合中央会会長賞

## 「父の米作りはみんなへの愛情」

朝日村立朝日中学校二年 清野 舞

私の家は、農家です。今までは、父と祖父二人で米作りしていたのですが、おとし、祖父が亡くなってしまったので今は、ほとんど父一人です。母や祖母は手伝うのですが、男の人の力を働くとすると、とても大変です。その分、父にかかる負担も大きくなるのです。

去年の春、私も田うえを手伝いました。妹と二人で稲の入っていた、プランターを洗う作業をしました。この日は、三枚の田んぼに稲を生えたのでプランターの量は、妹の身長をもこし、私の身長もこすぐらいすごい量で始め見た時は、

「無理だぜなー。」

と、言いながらイヤイヤやっていました。そしたら今度は苗に薬をまいてくれと言われ妹がそっちへ行ってしまう

い、プランターを私一人で洗うことになってしまったのです。二人で洗っても、まだ三分の一ぐらいしか洗っていないのに残りを一人でしろというのです。私は少し怒りぎみで洗っていました。まだ春ですが日はとても暑く汗ダラダラです。けれど時おり吹く涼しい風に少しづつ、さっきまでの腹だたしさがぬけてゆくようでした。それに、田んぼの土のにおいや、生えたばかりの草のにおいも私は好きです。そして、少しの休憩を取りました。私は小さい時からこの休憩が好きでよく田んぼに手伝いに来ていました。そのことは今も変わりません。それに、大変な仕事をやり終えた達成感もあり、とても気持ちよかったです。田植えには祖母や母も手伝いました。みんな泥だらけになりながら仕事をした後の顔はどこか生き生きしていました。

その年の夏、暑い日射しにも負けずのびのびと成長してゆく稲の田んぼへ、夜水を入れたり止めたりしなければいけないので父は夜遅くまで起きて、懐中電灯を持って出かけて行きます。私も何回か付いて行ったことがあります。田んぼのあぜ道はとても狭く、ぬかるんでいるのでとても歩きづらいです。その時父が一つしか持つ

ていなかっただ懐中電灯を私に持たせて、父は真っ暗な道をたんと進んで行きます。その夜は、私と父とカエルの声だけが田んぼに響いていました。

その年の秋、黄金色に輝く稲を収穫する日が来ました。その日は、家族総出で手伝います。コンバインで父が稲を刈り、母が刈った米を家まで運び、祖母がコンバインでは刈り取れない所の稲をカマで刈ります。妹は父のコンバインに乗ってはしゃいで、私は祖母の手伝いをしました。なれない手つきで刈ってゆく私を楽しそうに横目で見ながらどんどん刈って行きます。けっきょく、ほとんど祖母が刈りました。その刈った米を又カと米へ分ける作業があります。その山のようになった米を機械の口へスコップで持って行きます。その作業も父は夜遅くまでやっています。父はその仕事を一人でやっています。どのぐらい大変かは、わかりません。父の姿はいつも笑顔でそんな疲れをめったに見せないからです。そんな父はすごいと思います。祖父がいなくなつた今、疲れた姿を見せてはいけないと思つているのでしょうか。でも私は父のそんな姿が父の生きてきた強さであり、プライドなのだと思います。そんな父のことをよくわかっている

母や祖母がいるからこそ、今の父があると思います。

そして今年も秋がやって来ました。どこかぎこちなかつた去年の父とは違って、手ぎわよく作業をしています。ある日、普段のご飯とは違う輝きで光つているご飯が茶わんの中にありました。私はこのご飯が大好きです。家族みんなで作つたご飯だから。父は稲の生長と一緒に私たちの成長も見守っていてくれた気がします。稲と私たちに関わっている時間は稲の方が多いと思うけど、その稲から取れた米から父や家族のたくさんの愛情をもらっているんだなあと、あらためて実感した一年でした。

